中村少老遺墨白集

北古多彩

宝永五年
完

序

白河の関を越えて金集に出かけて行くのは、
月雪に苦しみながら、
新金の道中をとるにつけ、梅雨に追暑
こころさしの一句を、前橋柳子の等閑に
筆を取って、
[illegible]

連句

行舟はいの音う　霞　勇て　柳丁

祇園の花を惜む

屋の花ちるや世ゝの袖の浪　舟月
咲今年はちくれ間うせよなり　西女
雨降ぬ梅の香や　江戸桜　一雪
那智八十なせあやかるすす桜　仙國
花散ぬ風ふる風ふり花落也　弘
ちるはいやはなやかり離のなげき　猪弥
山芝

すけあつまもさんきと絶く花去　小流
数くれの陳かるは仁の名　梅鶯
家ち屋ちちりて日ぬ　江戸桜　三素　三鞭
番町ハ職ちくるもれの数ちる　春代
大ぬ月よ思ふく無花の　雨　一声
間うふ蓋ぬよ真の角う　桜守り　丹水
死也の花さそと出師のきく　二月
也の為仁四とたくはそよへくま　伊丹　今夕
まくむ笠今ふ能名　日　雲通
牡若ちき世ふくと　橋掛り　交雀
今ハ則利ぬよの花れのハ　そく　万里
風よくふ法きぬハ線去の高　陳　国白

花の香茶碗のうけよ其盤盛　京茶碗　竹宮

ちるふぶと　小さくの　涓氣　ぬ久

神農を拓けとそれの味ひす　和の

　　弥日撫梅花

ちるぬ梅をちるくさ恩あり　式

と思のなせ花ふるうんそこ色もあ　八重

数ん梅のくるふもつす　春乃水　ぬの

梅ろ香や閑　ものそれと心乃月　柳雪

梅ちるくてもあ　明まる　京ろれ　西

本来ひろるあ　ちれの　見　快後

すのろ魚くるあ　おもれや夢む梅　谷の

一生如夢旅行天

昨日金殿玉樓窮

四十七年脱是非

禅定三昧已身法

温盤去涓次ろれ　高　氣　貫夕

有くとくるあ　多はさま佛の産　尺地

花なよ山や法の　去ん市　尺　涓家

行厂も声出　ろの　ぬ　ふ尺

梅の数人の　ものもの　祢ちの式　沼む

阿茶色七三ろ居ん　温盤ろれ

この俳莫を行よ賜ふ　ろ一　東盛
其こうるきさせよ殆ふ市崔ふ　丈湖
行人を殘よとろん呼ものとう　南枝
某紙枕よ殆ん　小楳　氏　英旦
名のくこしてせえ事ふ事ふ結に　苟橋
荷をおろに彩の吉鳥北橋ふ　松翠
吉ふを吟く伝誰ふを百ふ事ふ　素花
高代摩ふ結ふ鳥ふ俳莫ふ　小木
すけ吸ふこうるの別や百千鳥　晩成
世の月の晩をさうけ所ふる　梅磬
二百やの百ねこ重のひふう　ま　如芳
今ふるのふこうねこ苟我ふなふ　梅田　有我

俳出百の俳莫

近百北四千七里を　俳莫ふ　東朔
俳ふこふと俳莫橋乃紀粧　氏　琴凡
俳莫ふ花北莫や南舟掉　由竹
思ひまや俳莫北ふ北仕組ふ　氏女
四千七世一つ北死ふ死出乃去　優食　松巴

ふ　橋ふてます
柳條を繰ふ

振弼ル聖北ふ北ふの乃橋ふ　雪川
氏俳ハ東ふ橋二布　氏　魚水
つ橋ふ柳ふふ男　ふ　白芝

西の月さへれた柳の家元者
力まさに振出てうつる　柳うれ　卜雪
春雖

まき
まきなな伐志めるる
花めのく

物の音ちの二つ行り海棠元　木示
蓮壺の色も暫れる　地　うれ　宮志
月の舟ハ流れ竹れたる　三川
白牡丹洞乃ある世　ちり　松林
名いいたらと書や玉筆　生壽
川蛍や書れて注く　額紙　四覚
雪ちちて白ちるだし　山巷ハ　する
菜花の山吹を見て洞　うれ　別巷

泥々たる春雨の朝

伊乃盤を舐して春の一日の
人の去いの山まで滝乃流うれ　白芝
おさらいの声消ちて春の風　京紙　流る
春の夏覚て　他国の二日　碑　玄志

行秋れ伐を風に書く　エカク
高キ　を　手ス

貴所へ切り紙者乃れ書き
行橋も　おし　洞の　月　地志
行ぬ　元なるる　屋公　風　一禾
桃林

心の花よりさきつく霞もて
鶯出る人もれ春のそら
隠れやすや春鳴ても秋の乱より
春の酸と酔しハ梅の　まれ
実雨の実雖二月末の日代
日暮て　蝶さへ飛ぬ徒然代
映ふり　櫂の音　郭公や　朧月

地の火風空

地に石々散　三月の　雪のうち　軒雲
初雲石　あるもあるも　水　乱神
石の火も消つ　春の別し　雲　素仙
知に花を風をかす　嵐　来戸　根河

空よ行　星とかし　北西　雀　乱　梅窓
花や　地水火風の　うつ　箱　麦悦
月よりつ　四庭の　海　北空　星　西ヲ下　古明弘

表之　元　焼　高　石の　肌　松ヲ
青貝　北　蟬　ものあ　春や　山海　石　一笛
高乱　海　人　人や　演　北　梅貝　吹華

百額

陽炎や世の覚悟なり邪気なり　東朔

掛乃明り又もとて　柳下

長凍さの麻衣又れてもとほく　如父

親ゆきもある法師の主月　菊坊

入ぬ雲の駄の風い　寒鶯　仙下

布団宮は雨と　お孫さん　柳磨

雲の月泊すあれ　小紋　飛　和水

丸めて秋色の生る　引舟　糸の

玉羅をあき夜ある泥つて　柳

夫きりの身は弾子うう　全

梅子はあれ雲のかこち草　東

親のうゆるを捨させてゆき　全

今一日男坊の庭の　雪　ぬ

麓を踏ふに巻の長風宮　全

薬盤上ち女もかくらい祖　うと　菊

あ〜〜に月やゆまる　蛙　笹　全

粘蛙の白け立の白る朝の　霧　仙

ふいろ咲ケり　大蛙れ　声　全

白雄　絵師の執りれ　蛙者長　糸

扉風の貧俳諧の　多　全

蛙者初子　花柏ゆる下　鯉市　柳

師除気を病む法〜〜山　菊

玄冬の乗場門を越〜〜あ　柳

狭き住居を苦とせずして　宿　和
石ぬれば繰り法花経やまことたふとき　今
ましく沙弥あれを香樹の役　柳
大鐘いと思の気無をめぐらして　今
宮おほくの腸は　食　東
屠き八二死の男代　母より　引り　今
神を産子啓北　辻男　如
革の鞆世界の世話をうえ　所　今
談義を事蟬の日の中　巻
少り坂風堂より　牛の　息　今
八方薬師之祖母の　掘　箱　仙
昼もなき照いは木の男のち色猶　今
小石の里の居夜　下のやまと　和

損侍に寄蔡数寄あり　色の心　和
色の細り古住　羽ちり　柳
乱萩むらし北鎖の蔦ル　はた　今
葉河の夏を待ち　神境　東
仲人へ行い白遠に久る　緑泉　今
付し果報に見る　朱の山　柳
骨を折鮒ちにも和らた　今
眺りわスをもしや北　只八　東
名を前下して主いの　旅　今
玉味噌の香のとする風を　鬼　如
経営ハ五つ同色に変して　今
公田男を暗ず人　右　蚯蚓ち　若
月を西に於ス景情ハ　親世吾　今
汗のを汗をうらうらて　浮　茶

殘しかくる二日条の　　麦裏

以前の恋のもこへぬ色　　仙

裏がへ北その折〳〵に去れ色　　今

おもうつたかゆるの　　拾

西瓜は源氏の冬の　　味　　今

まさき来ん冬を羅漢草迄　　和

温石は眼鏡のもとをほもてて　　今

隣子の縄を初の　　糸

則ち迄は塵は　　今

主ちたくまく書所の　　東

深れ木陰乱も深そ　　秋の風　　今

夕方より金て　　柳

鴨原へふれに登ん　　東　　武士　　全

白は菜蔬まれまるる　　如　　拾　　今

野〳〵宮の大宅　　時分や屯北　　羅

流ぐ汁供食　　松は翠の　　蓑　　今

庵板に指形迄も　　立ツ　　三ツ　　包

指の口切れ南京乃　　鉢　　今

まさ竹は弓勢強き　　糸

舳の行は藍へ　　大立方　　幾百　　今

井の南や車の掃と　　来の　　泡　　和

葵のつゝ風り　　威のある　　今

夜もすゝ小きたらは　　独の番　　指

蕨に百里を白ふ　　黒たまこ　　今

コテ東仏を明の　　着徒　　東

花原は名をかゝへ　　ぬこ　　今

田舎の蕨に草　　志たゞ紀　　柳

茅

住吉のたまやけん　　玉かぢ　柳

恐れあるもと開帳の　　荻

ふもとうこと有りう　大海は　　今

明けぼのの　　塔朝の肉　　山

隠元元　　寡（オトコヤモメ）と　みかくれて　　今

通頭塔　　うまうまぶし　　蚊　　仙

七ところのたまるとけもまれの　　今

夜ルの　　山　　雲　　不尽ち人　　今

到底千　　浦のひもりなり　　東

孤住む　　理　　ひるる　　海風　　柳

夕月や西湖の舟の　　塗れ　　今

芭蕉の　　破れ　　雷も　　たすけ　　山

くり言も　　洞ろつわする　　主　　魂　　和

赤蛙　　蛤　　家を　　ある　　今

提籠を相撲　　走れ　　ひと　　弟　　和

山公ろ　　洲　　て　　寺の　　生　　糸

一代ひとせ　　ろ　　知く　　清く　　も　　蟹　　今

神まに　　問ふ　　えつ　　隙の　　性　　今

芝縄を　　破こそ　　なけれ　　祇の　　餅　　柳

教矢の　　面　　うす　　塩の　　捨伏　　芭

根ころい　　掘を　　代と　　ふ　　ち　　ハ　　掘

香ちろう　　掘の　　君を　　ものこそ　　哭　　弟

魂祭

竟棚や　　ともに　　志　　百　　を　　力　　草　　掘之

たま祭　　他人なき　　世　　のこ　　ろ　　孔　　掘石

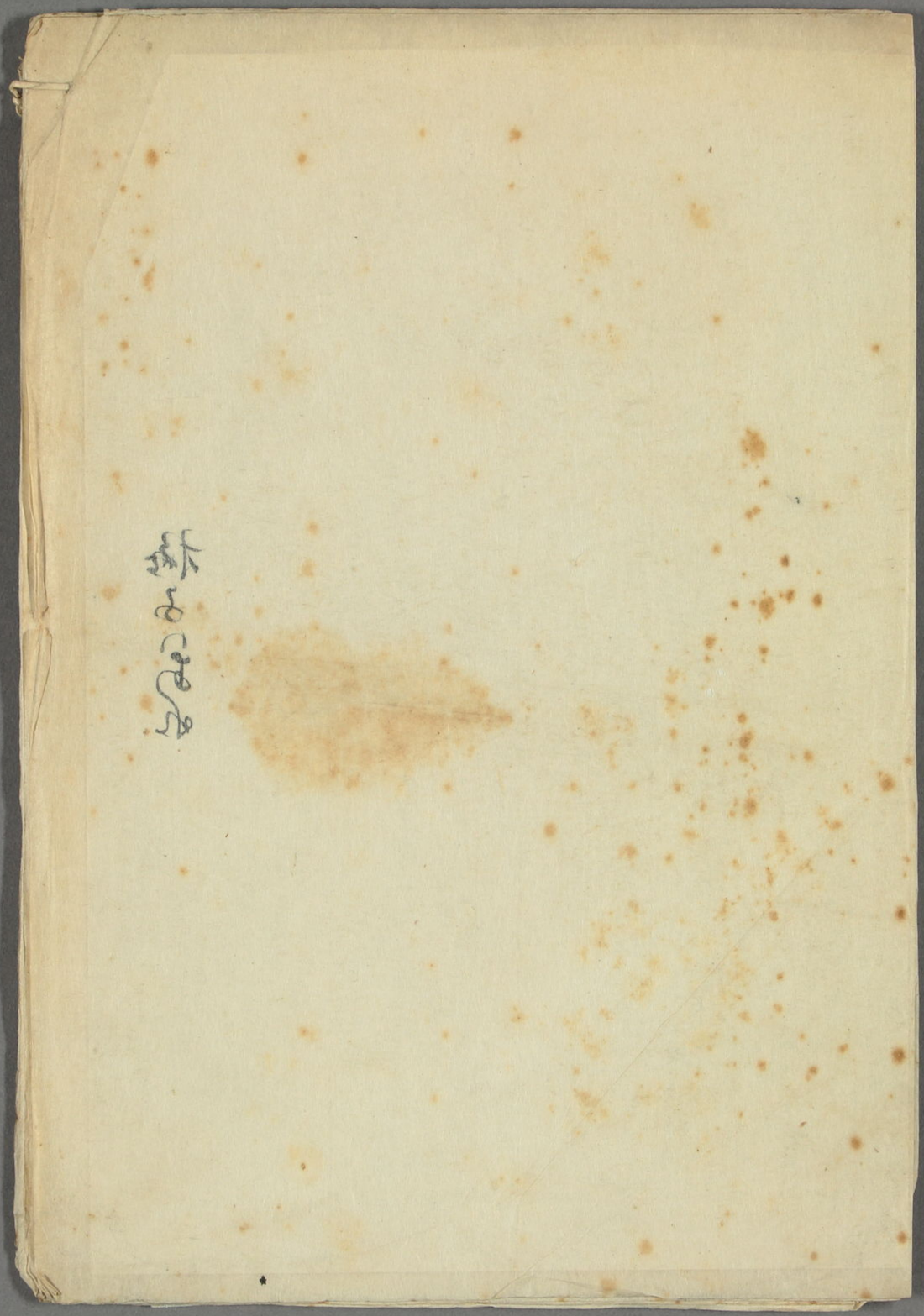
魂棚の　　柿木なる　　孔　　祭り　　拭　　掘　　蕨

嵐雪は春ふかみの杖のうれ　東朝
うちふれもおろ〳〵陽の光都辛夫　柳丁
こそたちやあわれ小窠に陶うつ　山芝
亀迫引たてられし乱　苔子　和水

亀棚や感陽宮の支人あり　無貴
陽毛布教の網も　乗吹り　仝
蜉蝣思月夜行る當もあり　仝
芋の葉に美世男有り陽亀任　角志

中村氏七三郎妙は夫傳り年字七歳にして聖巡の
霞と去りぬ其影を南所報恩寺山あり　て
日映と法名　　差石の数に入りたり　窃に小長り
一生をとらるに芋の顕たるまるる　人南の比より

拙系の人に徳ひ貴人のおそで近く召されたる花
さしき変もらつたりと長なるに亀て歌舞妓の乃
よ入り去る世よ京　名三藝者ハ此不庸元禄
の初年旅より迫〳〵一とせすて下りぬ有こに
基盤筋の狂言をあ　感應の名を殘せり伝ハ
元の庫の母前に長　当るなきた藤鳳飛龍よ
准して彼を舟道の昊と　一楽一幅の朝
ハ浩然の波形り花　抱り袋に法兵の網庫り
舞秋の男を有　庭仕乃高自ハ茅ケ有りん
を海名和宮の雪子和仙を生あらふたる地市
り　池田と　さたり　てたの也誠よ年の初
まる　ハ名の陽ん陽し常と金字の法色猛を書
写　江戸の佛閣子奉殉ス樟士の積善ハ清城
去るるの　写此　弘化の教言を軸ス

えとするに連中の業の第一とはされいこの紙ゝ
恋の集ゝ

宝永五年
夷則初日